

敬語表現の誤用に関する統計的分析

丸元聡子^{†‡}, 白土保[†], 井佐原均^{†‡}

[†]通信・放送機構, [‡]通信総合研究所

{marumoto, shirado, isahara}@crl.go.jp

1. はじめに

日本語の待遇表現のうち、特に敬語表現に関しては、近年、その乱れや変遷が指摘されてきている[1, 2, 3]。本研究では、このように言語学的観点からは規範的でないと考えられる敬語表現の使い方を敬語の「誤用」と呼ぶことにする。本研究では、明らかな誤りだけでなく、用い方によっては不適切なもの、なじまない表現なども敬語の誤用として扱う。このような敬語の誤用が相手に与える違和感の強さは、誤用の種類に依存する可能性がある。

敬語表現に関する従来の研究は、言語学的アプローチが主であり、数理的アプローチはほとんど行われてこなかった。敬語表現に対する数少ない数理的アプローチとしては白土の研究[4, 5, 6]や荻野の研究[7]などがある。しかし、これらの研究は表現の丁寧さの程度を数値化することを目的としていた。

本研究では、敬語の誤用に対する不自然さ(自然さ)の心理的印象を実験心理学的方法で数値化した上で、自然さの程度の、誤用の種類や被験者属性への依存性を統計的に調べることを目的とする。

2. 本研究で注目する誤用の種類および被験者属性

2.1 敬語の誤用の種類

菊池[8]によると、言語学的な見地からは敬語の誤用は大きく以下の7つのカテゴリに分類できるとされる(表1)。

本研究では、表1のカテゴリのうち、カテゴリ1から4に注目する。なぜなら、これらの誤用が昨今、特に増えていることが指摘されている[8, 9]からである。このように過渡期にある誤用を調べることは、敬語の変遷を考える上で意義がある。

菊池はさらに、カテゴリ2はカテゴリ1に比べ、敬語の体系そのものに関わる誤用であるため、言語学的に、より重大な誤りであると指摘している[8]。

表1 菊池による誤用の分類

1. 語形の単純な誤り
2. (いわゆる)謙譲語と尊敬語の混同、混用
3. (いわゆる)謙譲語の機能を正しく理解していないための誤り
4. 「頂く」「下さる」に関する文法的な誤り
5. 身内を高める誤りなど
6. 過剰敬語
7. 文体上のアンバランス

カテゴリ1(語形の単純な誤り)には、二重敬語や「お/ご~される」などが含まれる。このうち後者は、規範的には正しい語形と考えられていないものである。本研究では、いわゆる尊敬語(以下、尊敬語と表記)を尊敬語として用いるケースのみ想定する。

カテゴリ2, 3は、いずれもいわゆる謙譲語(以下、謙譲語と表記)を尊敬語もしくは丁寧語として誤って用いるものである。ただし、カテゴリ2が「お/ご~する」のような謙譲語の枠組みを、尊敬語の枠組みとして誤って用いるのに対し、カテゴリ3は交替*を起こすタイプの謙譲語を尊敬語として用いる点が異なる。

従って言語学的には、カテゴリ3は、カテゴリ2に比べて、より重大な問題であると考えられる。

言語学的に問題とされる度合いが大きい程、その誤用に対して人々の持つ違和感が強くなると考えると、前述の誤用カテゴリ1, 2, 3の順に、それらのカテゴリに属する表現に対する違和感が強くなると予測される。(予測1)

* 交替の例: 行く(常体) → 参る(謙譲語)

2.2 被験者属性

敬語表現の習得は社会的経験の豊富さに依存する可能性があるため、本研究では、大学生と40代以上の2通りの年齢層に注目する。このうち、若年（大学生）の方が誤用に寛容であることが予測される。（予測2）

また、性差に依存する可能性もあるため[10]、性別にも注目する。

3. 敬語表現の誤用に対する不自然さ（自然さ）の数値化

荻野の研究においては、敬語表現に対する丁寧さの印象が一次元で評価できることが報告されている[11]。本研究では、この報告からの類推によって、誤用を含む任意の敬語表現に対する自然さの印象についても一次元で評価できるものと仮定する。この仮定の下で Scheffe の一対比較法[12]による数値化を行う。

Scheffe の一対比較法は、間隔尺度構成の一種である。このため、異なる被験者グループのデータに基づいて、いろいろな敬語表現の自然さを数値化した時、（以下、数値化した値を v と記す） v の絶対値をグループ間で比較することはできない。ただし、 v の値域の幅でグループ間の違いをある程度比較できる。 v の幅の大きさは、言語学的に誤りの程度の異なる表現間の違いを認識できる能力を表している。

以上の着眼点、および数値化手法に基づき、次のような実験を行った。

4. 心理実験

4.1 実験に用いた表現

実験には、前述したカテゴリの1から4に属する33個の表現を用いた（表2）。これらの表現は先行文献[8, 13, 14]を参考にして著者が生成了た。

4.2 被験者

被験者は、性別2通り×年齢層2通り=4通りの被験者グループからなる。各グループは10名、合計40名である。

4.3 実験手続き

被験者には「ある生徒がその先生に対して発話しているところを、あなた自身が横から聞いて

表2 実験に用いた表現

行 No.	表現
1	今、先生が笑っちゃられました意味が分かりません。
2	校長先生は来週からご旅行になられるそうです。
3	駅にお着きになられたら迎えに行きます。
4	先生がご卒業された大学はどちらですか。
5	先生がご説明されるには及びません。
6	いつご入院されたのですか。
7	先生がご答えされるのを聞いていました。
8	先生がご読みされた本はどれですか。
9	この本はお求めやすい値段です。
10	今、先生の名刺をお持ちしていますか。
11	この列車は乗車できないそうです。
12	この列車は乗りできないそうです。
13	きつのご満足して頂けると思っています。
14	こうした事情を先生にご理解して頂けたらと思います。
2	15 先生にご指導して頂いたお陰で卒論が書けました。
16	先生にご指導して下さいましたお陰で卒論が書けました。
17	この紙は書きまして頂けますか。
18	わざわざお送りして下さい、ありがとうございます。
19	我が家にも、ぜひお立ち寄りして下さい。
20	申し込み用紙にお名前をお書きして下さい。
21	先生のお名をお召さんが何人ございますか。
22	先生は、うちの弟にお目にかかったことがありますか。
23	これは父から伺った話です。
24	連中は、どちらに参りましたか。
25	先生が申しましたように、…。
3	26 先生もその会にご出席致しますか。
27	明日はお名をお召下さいますか。
28	切符は窓口で頂いて下さい。
29	明日はお名をお召下さいますか。
30	今、先生の申されたことに賛同があります。
31	先生は、その会に参られますか。
4	32 先生が（私）地図を書いて頂いたので、助かります。
33	先生の本を読まさせていただきます。

ている場面を想定して下さい」と指示した上で、一対の表現を順次、呈示し、各対におけるどちらの表現が、どの程度、より自然であるかを判断するよう求めた。一対の表現としては、表2に示した表現の全ての対を用いた（総数： ${}_{33}C_2=528$ 個）。

これらの表現は、いずれも誤りを含んでいるが、被験者にはその旨は告げていない。

前述のように、不自然さの数値化には、Scheffe の一対比較法を用いているが、その適用に際しては、予備実験の結果（刺激呈示の順序効果が有意でない）を踏まえ、中屋の変法[12]を用いた。

以上の条件の下、被験者全員、および各被験者グループに対し、表 2 に示した全ての敬語表現の自然さを数値化した。

5. 実験結果

5.1 全被験者の結果

各表現に対して、被験者が感じる自然さの程度 v の値を図 1 に示す。図中の数字は表 2 の表現 No. に対応している。図 1 の縦軸は、No. 27 の表現 (v が最小) を 0 とした相対値として表している。図中、“yard stick” は、この幅よりも離れた v の値の間では、危険率 1% で有意差があることを表す。

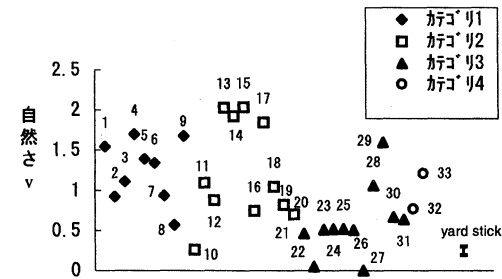


図 1 実験結果

図 1 から、カテゴリ 1 に属する表現は、カテゴリ 3 に属する表現に比べて概して v が大きいことが分かる。また、カテゴリ 2 に属する表現は、表現に依存して、概ねふたつのグループに分かれて分布していることが分かる。

5.2 被験者グループ毎の結果

被験者グループ毎に数値化を行った結果、カテゴリへの依存性に関しては、どのグループにおいても全被験者の結果 (図 1) と同様の傾向が見られた。

グループ間の違いを見るために、各グループにおける v の値域幅をそれぞれ求めた (表 3)。

表 3 各グループにおける自然さ v の幅

性別	年齢層	v の幅
男性	大学生	1.9
	40 代以上	2.0
女性	大学生	2.1
	40 代以上	2.3

表 3 は、性別によらず、40 代以上は大学生より v の幅がわずかに広く、また年齢層によらず、女性の方が男性より幅がわずかに広いことを示す。

6. 考察

6.1 全被験者の結果に対する考察

6.1.1 カテゴリ依存性

図 1 において、 v の値が最も大きい表現グループ: No. 13, 14, 15, 17 (このグループはカテゴリ 2 のうち、「頂く」を含むグループであるので、以下では“カテゴリ 2 頂くグループ”と呼ぶ。このグループについては、6.1.2 で触れる) を除いて考えると、カテゴリ 1、2、3 の順に v が小さくなっている傾向が見られる。これは、前述の予測 1 に符合する。

以下では、その理由を詳細に考察する。

[カテゴリ 1 とカテゴリ 2、3 との比較]

カテゴリ 1 よりカテゴリ 2、3 の v が小さくなった理由としては以下が考えられる。

カテゴリ 1 は前述のように尊敬語を尊敬語として用いているため、待遇の向きが同じである。一方、カテゴリ 2、3 は謙讓語を尊敬語として用いているため、待遇の向きが逆である。この理由により後者に対する自然さの程度が下がったものと考えられる。

[カテゴリ 2 とカテゴリ 3 との比較]

カテゴリ 3 の v がカテゴリ 2 より小さくなった理由としては、以下が考えられる。

前述のように、カテゴリ 2、3 は、いずれも謙讓語を尊敬語として用いる誤用である。

ただし、謙讓語であるという認識のしやすさに関して、カテゴリ 2 とカテゴリ 3 は、以下のような相違がある。

カテゴリ 2 においては、離れた二つの要素から成る枠組み (この場合、要素「お／ご」と「する」から成る枠組み「お／ご～する」) によって謙讓語の機能が作り出されている。謙讓語であるという認識を正しくするためには、この枠組みの認識を正しく行う必要がある。

これに対し、カテゴリ 3 は、表現自体の交替によって、謙讓語が作り出されている。

よって、カテゴリ 2 に比べ、カテゴリ 3 の方が謙讓語であるという認識をより直接的、すなわち、より容易に行えると予測される。

従って、今、謙譲語であるという認識がより容易である程、その誤用をより不自然と感じるものと仮定する（この時、 v の値がより小さくなる）と、カテゴリ3の v がカテゴリ2より小さくなると考えられる。

6.1.2 “カテゴリ2 頂くグループ”に関する考察

前述のように、このグループに属する表現は、カテゴリ2に属しているにも関わらず、自然さ v が最も大きい（ちなみに、カテゴリ2に属する他の表現に対する自然さ v は小さい）。このことは、尊敬語・謙譲語の区別を危うくする恐れをはらむ問題である。このグループに属する表現の v が大きくなった理由としては以下が考えられる。

“カテゴリ2 頂くグループ”に属する表現は、いずれも「頂く」を含む。これらの表現においては、「頂く」という語の印象が強いため、「お／ご～する」という枠組みの認識が弱くなってしまった可能性がある。

また、別の理由としては、「ご～頂く」が文法的に適切な表現であるため、形の上で似ている「ご～して頂く」もまた尊敬の表現である、というような間違った類推をしてしまった可能性もある。

6.2 被験者グループ毎の結果に対する考察

前述のように、表3の結果は、 v の幅の大きさは、性別によらず40代以上の層の方がより大きく、また年齢層によらず女性の方がより大きいことを示す。

前述の通り、 v の幅の大きさは、言語学的に誤りの程度の異なる表現間の違いを認識できる能力を表す。従って、この結果は、予測2に符合する。

7. おわりに

敬語表現の誤用に対する不自然さ（自然さ）の印象を実験心理学的方法で数値化した。

その結果、1) 語形の単純な誤りに比べ、「謙譲語を尊敬語として用いる」という、機能理解の誤りに対する自然さが小さい、2) 年齢層や性別によって、誤用に対する弁別能力が異なる可能性がある、ことなどが示唆された。

また、言語学的な見地から重大な誤りとされ

る誤用ほど、被験者が不自然と感じる傾向が見られた。

さらに、枠組みによって謙譲語の機能が作られている表現においては、「頂く」を含む場合、自然さが特に向上する傾向があった。

敬語の誤用に関する自然さの印象の、誤用の種類や年齢層などへの依存性および依存の大きさが明らかになれば、敬語学習システムなどの教育システムへ適用が可能である。例えば、不適切な敬語の使用に対して、指摘のレベルを設定した上で誤りを自動的に指摘する（学習者の習熟度に応じて指摘の順番を変える、許容されている表現については、その旨も表示する、など）が考えられる。

今後の課題としては、被験者の人数や、敬語表現の数・バリエーションを増やす必要がある。特に、各被験者の敬語に対する習熟度を検討するためにも、文法的に誤りを含まない敬語表現を呈示する必要があると考える。

参考文献

- [1] 鈴木一彦, 林巨樹編, “研究資料日本文法9 敬語法編,” 明治書院, 1984.
- [2] 石野博史, “敬語の乱れ-誤用の観点から-,” 文化庁「ことば」シリーズ 24 続敬語, pp. 44-54, 1986.
- [3] 林四郎, 南不二男編, “敬語講座6 現代の敬語,” 明治書院, 1973.
- [4] 白土保, 井佐原均, “待遇表現の丁寧さの計算モデル - 語尾の付加による待遇値変化 -, ” 自然言語処理, Vol. 5 No. 1, pp. 25-36, 1998.
- [5] 白土保, 井佐原均, “統計的手法に基づく敬語表現ストラテジのモデル,” 電子情報通信学会思考と言語研究会, TL99-30, 1999.
- [6] Tamotsu Shirado and Hitoshi Isahara, “Numerical Model of the Strategy for Choosing Polite Expressions,” LNAI (Proceedings of CICLing 2001), Springer (will be published), 2001.
- [7] 荻野綱男, “敬語の丁寧さを決定するもの,” 数理科学, No. 258, 1984.
- [8] 菊池康人, “敬語,” 講談社, 1997.
- [9] 蒲谷宏, 川口義一, 坂本恵, “敬語表現,” 大修館書店, 1998.
- [10] 間宮武, “性差心理学,” 金子書房, 1979.
- [11] 荻野綱男, “待遇表現の社会言語学的研究,” 日本語学, 5(12), pp. 55-63, 1986.
- [12] 三浦新他編, “官能検査ハンドブック,” 日科技連, 1973.
- [13] 堀川直義, 林四郎編著, “敬語用例中心ガイド,” 明治書院, 1969.
- [14] 林四郎, 南不二男編, “敬語講座1 敬語の体系,” 明治書院, 1974.